Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

書評・原田環『朝鮮の開国と近代化』

木村，幹

(Citation)
東アジア近代史,1:111-113

(Issue Date)
1999-03

(Resource Type)
article

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000404

書評・原田環『朝鮮の開国と近代化』（渓水社、１９９７年）

神戸大学大学院国際協力研究科　助教授
木村　幹

冒頭から私事で恐縮であるが、評者は学生時代、同じ近代朝鮮史を研究する友人達と、次のような世代論を戦わせたことがあった。朝鮮近代史研究を開いたのは、植民地期の研究者であり、彼等が朝鮮近代史研究の第一世代。今日我々が用いている研究資料や枠組みの多くは彼らにより開拓されたものであり、我々はその影響を色濃く受けている。戦後の世代は、これら第一世代の編み出した研究を「植民地史観」として批判し、この修正に尽力した。彼等が第二世代であり、これが今日の研究の主流となっている。これに対して、現在ではこれら第二世代の研究成果もまた、批判に晒されるようになっており、この批判に従事しているのが、朝鮮近代史研究の第三世代。その成果はまだかっちりとした形になっていないが、彼らよりも更に若い我々は、今後、この第三世代の研究成果を見守り、更にそれを批判することを要求されるであろう。以上のような話を良くしたものであった。

以上のような我々の「世代論」が的を得ているかどうかはさておき、本書評で扱う『朝鮮の開国と近代化』の著者である原田環氏は、我々がこのような学問的雑談（？）をする際に必ず念頭に置かれる「第三世代」の代表的な研究者であった。そのような著者の特質を何よりも如実に示すのが、この一見ありふれて見える『朝鮮の開国と近代化』という、本書の表題であろう。今日まで、類似した表題を掲げる書物や論文は数多く書かれて来たが、それらにおいて、「朝鮮」と「近代」という二つの言葉をつないで来たのは、「開化」という用語であった。勿論、本書もまた、朝鮮の「開化」について扱う著作なのであるが、ここにおいて著者が敢えて表題で、「開化」ではなく、「開国」という語を挙げたのには、おそらく意味があるのであろう。著者自身も本書の中で述べていることであるが、これまでこの「開化」という用語は、それが使われる頻度にも拘らず、その内容が厳密に定義されることなく、また、論者によって、様々な意味で用いられて来た。言うまでもなく、このような定義の不明確な用語を用いて分析することは、極めて危険であり、著者はそのことを十分に理解しているように思える。著者にとって、「開化」はそれ自身が分析の対象であり、言い換えるなら、「朝鮮の開化」そのものを明らかにすることこそが本書の最大の課題の一つである、と言えよう。

しかし、それならば「開化」を分析する手がかりとして、著者はどうして「開国」を選択したのであろうか。このような我々の疑問は、本書を読めばたちどころに解消することとなろう。即ち、著者が本書において最も注目するのは、前近代朝鮮が著者の言うところの、冊封体制に組み込まれていることであり、朝鮮の「開化」はそのような前提から出発したということである。日本や清国にとって、「近代化」とは、即ち、新たなる西欧的国際秩序の到来に対して、列強と伍して行く国力をつけるべく、「文明開化」や「自強」に努めることであった。しかし、これに対して朝鮮には、異なる課題が存在した。冊封体制から出発した朝鮮は、主権国家から構成される西欧的国際秩序の中で、まずもって自らが何者であり、その中に如何にして自らを位置づけるかを決定する必要があった。「開国」とは、そのような朝鮮が、自らを位置づける正にそのことであり、それ故、朝鮮の近代を考える上で、このことはさけて通れない課題であった。言い換えるなら、日本や清国にとって、近代化は「開国以後」に始まった。しかし、朝鮮においては、「開国」とその様態こそが、近代化そのものであったのである。

冊封体制から西欧的国際秩序への移動の中で、朝鮮は如何なる選択を行い、その選択は如何なる結果をもたらしたか。本書はこのような問題意識に貫かれている。そのような本書における圧巻は、何といっても著者がその研究開始当初から一貫して取り組んでいる、朴珪壽に対する分析であろう。豊富な一次資料に基づく綿密な分析は、文字通り他の追随を許さぬものであり、我々は朴珪壽のみならず、開化派研究そのものにおいて、本書に教えを乞うところが大きいといえよう。この朴珪壽分析に代表されるように、本書の最大の特徴は、著者の「近代」そのものを視野にいれたマクロ的分析と、綿密な実証研究が総合されているところにある。その詳細は、本稿のような小稿で語り尽くせるものではなく、その評価は読者諸子にお任せすることとしよう。

蛇足になろうが、評者の責として、本書において、気になるところもあったので、簡単に触れておくこととしよう。第一に、これは本書の成り立ち上、致し方ない点であろうが、本書は、著者がこれまでに執筆した論文を基に構成されている関係上、若干まとまりを欠いたものとなっている。特に第三編については、各章の位置づけ、及び分析に対象の選択において、より一層の説明が必要であったのではなかろうか。第二に、本書の分析において中核の一つである冊封体制の位置づけである。本書では第二章でそれが試みられているが、多分の「曖昧さ」をも包含する冊封体制が著者の言うように明確に図式化できるかどうかは疑問の余地があろう。第三に、本書においては「現実性を欠いた」という類の記述

が幾度か見られるが、我々はこのような条件におかれた朝鮮に、それ以外に如何なる選択肢があったかについて考慮する必要があろう。勿論、評者とて、朝鮮の近代に辿るべき異なる道があった、また、他国の近代にはなかった今日的な観点があった、とする楽観的な立場に立つものではないが、さりとて、近代朝鮮や各々の分析対象の思想や行動が、何故にこのような「現実性を欠いた」ものとなったかについては、若干の留保が必要であろう。

以上、最後に若干の不必要な「妄言」を付け加えたが、にも拘らず、本書が今後の朝鮮近代史研究において、「乗り越えるべき著作」として、多大な価値を有するものであることは、強調してし過ぎることはないであろう。著者は、現在においても第一線で活躍する最もアクティブな研究者の一人であり、今後の一層の活躍を期待したい。そして、それは「第四世代」を自負する評者のような若手研究者にとっても、また好ましいことであるに違いないのである。